

変わる障がい者雇用 理想の現場を追う!?

自然とふれ合う農業が  
障がい者にも企業にも、  
心からの笑顔をもたらし

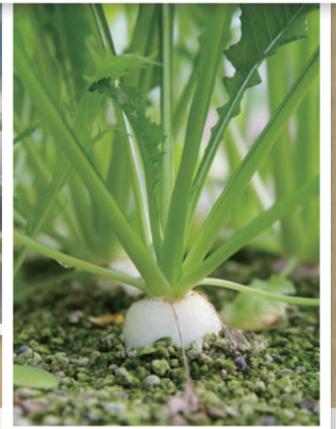


障がい者の法定雇用率が2.0%にアップされ(従来は1.8%)、従業員50人以上の企業に障がい者雇用が義務化された。しかしその一方で、「苦勞して採用しても長続きしない」「彼らに任せる仕事がない」といった採用現場からの悩みが多いのも事実である。そうしたなかで、働く現場には笑顔が絶えず、退職者もゼロ、そんな障がい者にとっても、企業にとっても理想的な労働環境を農業によって作り上げる企業が増えている。そこに共通するのが、企業向け貸し農園「わーくはびねす農園」を利用した「障がい者雇用支援サービス」だ。同サービスを通じて笑顔あふれる雇用の現場が生まれていく、その背景を探っていく。

わーくはびねす農園ののどかな1日



野津洋輔くん(左)と田丸雄登くん(右)。二人は、自分たちが食べたいと思うものを「作りたい」と会社に申し出る。たいていは許可されるが、条件がつくこともある。たとえば、「ニラを作りたい」と申し出たとき、「それでは黄ニラを作らなさい」と言われた。黄ニラを知らなかった二人は、農園長と一緒に作り方を勉強した。「黄ニラは、種は緑のニラと同じだけど遮光して育てるんです」(農園長)。1回目の収穫では試食することになっている。もちろん、美味しかった。「これはサンチュ。やわらかくて甘くて、美味しいよ!」



東京から約1時間  
見晴らしのいい田園地帯

千葉県市原市。JR内房線の五井駅からクルマで約10分走ったところに青く澄み渡った高い空の下、白いビニールに覆われたパイプハウスが建ち並ぶ。株式会社エスプールプラズが運営する「わーくはびねす農園」である。

2013年12月現在、ハウス数は6棟。1棟のパイプハウスのなかは30区画で構成されている。参画企業は、必要に応じて区画数を契約し使用する。

「参画社数は13年未で、約20社になります。その企業さんに雇用され、働いている知的障がい者の方は約80人です」(同社取締役 わーくはびねす農園 事業部長 和田一紀氏)

一つのハウスに入ると、「おはようございます!」と元気な声が飛んでくる。そこで働いている人たちは、じょうろで水をまいている一人と、プランターの前でかがみ込んでいたもう一人がこちらを見て笑っている。パイプハウスは温室ではないが、取材当日の厳しい冬場でもハウス内は適温だった。外気は遮断され、ほどよい温度、明るい光がいっぱいで春のような陽気だ。

「細かい作業をしんぼう強く続けます。とにかく、ていねいです」  
毎日二人と一緒に農作業をしている農園長の女性は、そう言うて感心する。

ベビリーフは「1センチで収穫」するように、会社から言われている。それ以上に育ってしまったものは規格外になってしまふ。街のスーパーマーケットで売っているベビリーフは1センチをはるかに超えているし、大きくなっても食べられないわけではない。が、彼らの会社では、ベビリーフは1センチと決められているのだ。

「1センチの小さな葉を摘むのは、大変です。しかも、それを何十グラム単位にまとめていきます。実に根気がいる作業です」

農園長の女性は、「二人がしっかりとやってくれます。私には無理」と笑う。

水まきもそうだ。この農園にはスプリンクラーが設置されている。水まきはスプリンクラーですればいいが、彼らにとっての水まきは「じょうろで」。細かい仕事をていねいにするには、彼らの性に合っているのだ。

農園で作りたいものは、二人が相談して決める。たとえば「ギョーザ



都心から1時間ほど。千葉県原市にある広大な敷地に「わーくはびねす農園」のパイプハウスが建ち並んでいる。ハウス内は、清潔で、明るく、静かに、野菜づくりが営まれている。ここでは障がい者雇用の農業に最適な「フィールド栽培装置」が採用されている。収穫後すぐに次の野菜を植えることが可能な土で、掘り返す必要はないためトラクターのような大型の農機具や鍬などは不要。通路にはビニールシートが敷かれており、ゴム長靴を履かなくてもいい。「清潔、安全」がモットーだ。

## わーくはびねす農園施設概要



収穫した野菜は出荷できる状態に整える。汚れた外葉を取り除き、根はきれいに切りそろえられる。この瑞々しさが、そのまま本社に届く。箱詰めも彼らが担当し、伝票を貼ればいつでも出荷できる状態に仕上げる。この出荷作業をする建物や備品等の保管用建物、休憩所などは参画各社の共有スペースになる。そこでは、各社農園長を交えて、作物についての情報交換も日々行なわれている。農園長の多くは、社会経験、人生経験豊富なシルバー世代。農園長の包容力が、そのもとで働く知的障がい者の人たちの我慢強さと、屈託のない笑顔を生んでいる。



株式会社エスプールプラス 取締役 和田一紀氏

「を食べたいね」「じゃあ、ニラを作ろうよ」というように。そして、それを会社に申請して、許可が出たら作る。二人は、食べたいものを農園長に助けられながら、協力して育てる。その農作業は、とても楽しそうだ。

「この農園で学んで就職すれば、給料をもらいながら、農業を通じて学んだことを実践でき、しかもそれを継続できる。彼らにはこの点が大きい」(和田氏)

このシステムが始まって4年目になるが、これまで離職者はいない。雇用する企業にしても、いきなり障がい者の人を雇用しても、仕事に合わせ教育するのはかなり高いハードルだ。その点でも、採用者を即戦力としてスタートさせることができる、この農園のシステムはメリットが大きいといえる。

実は、わーくはびねす農園には、障がい者の就職を支援する「障がい者就職塾」(千葉県認可)が併設されている。そこで学ぶ障がい者の実技指導は、1棟のパイプハウス内に設けられた専用の区画で行なわれる。「ここで一通りの作業を覚えて、カリキュラムをこなせるようになったら参画企業さんに紹介します」(和田氏)

塾生の専用区画のすぐ隣りは企業が使用している区画で、そこでは塾の卒業生が働いている。

つまり、塾で勉強して仕事を覚えたら就職するという一貫システムで、勉強した場所とほとんど変わらない環境で就職して仕事をするようになる。

障がい者の人に農業を教える支援機関はあるが、農業の就職先はほとんどない。農業は個人で営んでいるケースが多く、人を雇えるほどの余裕はないのが現状なのだ。だから、障がいを持つ人が農業の技術を学んだとしても、それを生かせる場が少

**S-POOL 株式会社エスプールプラス**  
 (JASDAQ上場会社(株)エスプールの100%出資子会社)  
 本社所在地: 東京都中央区日本橋2-15-3  
 ヒューリック江戸橋ビル3階

障がい者雇用支援サービスに関するお問い合わせはこちら

0120-982-655  
 whf@spool.co.jp

セミナーも随時開催しております

開催日: 1/15(水)、2/6(木)  
 詳細はこちら <http://support.spool.co.jp>

## 3人とともに働くために農園長が積み重ねたコミュニケーション ようやくチームとしてのまとまりを実感

TDCソフトウェアエンジニアリングの農園「わかばファーム」の農園長は田中道太郎さん(63歳)。一緒に働いているのは、橋本翔さん(23歳)、植松進さん(46歳)、斉藤大地さん(24歳)の3人。4人とも12年11月の同期入社だ。

田中さんはこう語っている。「以前はドライバーでした。退職して仕事を探しているときにハローワークで、のんびり農業でもやるのはどうですかって言われて。農業をやってみたいと思っていましたし……」

しかし、現実はその甘くはなかった。「彼らがわからないことが、わからない。たとえば種を撒くときに『この真ん中に種を置くんだよ』って教えても、真ん中がわからないから真ん中に種を置けない。こっちは、彼がわからないのは『真ん中という言葉の意味』なんだ、ということが

わからなかった。わからないことがわからないというズレをなくさなければ、いつまでたっても、本当の意味で一緒に作業をしていることにはならない。一つのズレを修正するには、かなりの時間がかかる。

「時間がたって、『ああ、あのときこうだったんだ。これがわからなかったんだ』ってわかって、ようやく彼らとのズレが修正できる」

3人は持ち前の我慢強さで、田中さんに叱られながらやってきた。「えらいですよ。よくやりました」

1年たって、3人は仕事がいよいよできるようになった。

「いろいろなことがわかってきて、お互いになじんできたっていうのかな」

わかばファームを開園して約1年。ようやく田中さんは、3人と一緒に仕事ができるようになってきたという。つ得られるようになってきたという。

「わかばファーム」では、農園長の田中さんと一緒に、3人が働いている。収穫した野菜はきれいに洗ってから痛んだ外葉などを除いて整え、決められた量にパック詰めする。根を決められた長さに切り、葉を1枚1枚チェックする。ていねいな仕事ぶりは、ここでも変わらない。「障害はあるけれど、好きなことをしたいといった思いやプライドは、ほかの人と同じ。普通の若者です」(田中さん)。しかし、物をみんなで分けるときには、みんなが取り終わって残った物を取る。彼らにはそんな謙虚さがあるのだという。



### COLUMN

TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社 管理本部 人事部長 西山 徹氏

## 障がい者雇用の本当の意義を社内で共有できた

障がい者採用の現実を厳しく方法を模索している時期に、このサービスを知った。エスプールプラスと農園契約をした後、就農に適した知的障がい者の方3人と現場の管理者(現田中農園長)をエスプールプラスより採用支援を受け、採用。12年11月に開園した。

農園長の人間的な魅力もあってか、3人はこれまで無遅刻無欠勤愛情込めて栽培された野菜は定期的に本社に送られてくるが、あつという間になくなっていく。「こんな料理にして食べました」とお礼にレシビを送る社員もいるという。それが彼らの励みにもなっている。社内報を通じて、定期的にわかばファームの活動を伝えていく。特に幹部の人たちから、障がい者雇用に対する納得感を持ってもらえたようだ。採用から定着までサポートを受けられるワンストップのサービスに助けられた。

## 導入事例

### わかばファーム (TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社)

「わかばファーム」では、農園長の田中さんと一緒に、3人が働いている。収穫した野菜はきれいに洗ってから痛んだ外葉などを除いて整え、決められた量にパック詰めする。根を決められた長さに切り、葉を1枚1枚チェックする。ていねいな仕事ぶりは、ここでも変わらない。「障害はあるけれど、好きなことをしたいといった思いやプライドは、ほかの人と同じ。普通の若者です」(田中さん)。しかし、物をみんなで分けるときには、みんなが取り終わって残った物を取る。彼らにはそんな謙虚さがあるのだという。



企業プロフィール  
**TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社**

代表取締役社長 谷上俊二

業種 ● コンピュータソフトウェアおよびシステムの開発・販売ほか

設立 ● 1962年10月(創業)

資本金 ● 9億7040万円(2013年4月現在)

従業員数 ● 1,245名(2013年4月現在)

所在地 ● 東京都渋谷区代々木3-22-7  
 新宿文化クイントビル

電話 ● 03-6730-8111

URL ● <http://www.tdc.co.jp/>